きらめき

「物語」は終わらない・・・

台風一過の朝,田に向かうと生簀の中のフナは一匹もいませくんでした。田の中を悠々と泳ぐ姿が確認されました。捕獲しようと試みましたが,水の中は彼らのフィールド。とても素早く触れることすらできませんでした。翌朝,子どもたちの事実を報告し,翌日の「大捕り物」に備え,身支度や道具の用意を指示しました。翌朝・・・。朝５時前に田に行くと,田はとても静かでした。それは「不安」すら感じさせる静けさ。運動会の全校体育を終えて,子どもたちとそして「Ｅ（えらく）Ｒ（レトロな）カー」も,道具を乗せて再び出動しました。

田には前日に姿を現していたフナの姿はありません。一生懸命に探すのですが,やはりいません。嫌ぁ－な予感。子どもたちが声を上げます。「先生いたよー」子どもが指差しているのは・・・やはり隣の田んぼでした。エスケープ。人間の子どもだったら生徒指導事案です。しかしフナには適用できません。捕獲するにも他人の田。この田は,所有者と耕作者が別で,連絡もつきにくい。見逃すしかありません。　稚魚の繁殖も難しくなりました。「水草にメスが産卵し,オスの精子がかかり受精卵となる」理科で学んだことです。仮に田に残っても,田を覆う水草はありません。生簀だからできること。

そんな失意で「学校にもどると,学校の田の水が他の田にあふれていないか？」そんな苦情の電話がありました。フナがいる,稚魚がいるので水を一定に流し込む必要があります。しかし,毎日私が見ている限りでは近隣の田へ流れ出ているようにはみえませんでした。お電話頂いたご家庭にはすぐさまフナ飼育のことをお電話でお話をさせて頂き謝罪したり,親ブナが逃げてしまったので,もはや水を常時流し込む必要がなくなったこと,取水口を閉じたことをお話したりしました。。その翌朝・・・。

田に一匹のフナがもどっていました。奇跡です。何か挫折状況においこまれたとき,ちょっと元気づけられるクラスの象徴として名前をつけて教室で飼育していこうと思います。

放課後,再び田に行きました。何人か子どもも来ました。取水口からの注水のない田は,ぼぼ水位がなくなり,稚魚には厳しい環境です。荒地にすら見えました。そんな田を見つめていると･･･なんと親ブナがいます。もどってきていたのです。「こんなことがあるんだ」。まるでドラマです。残念ながら水位をさげた為に酸素不足で7匹が死んでしまいました。しかし 8匹を捕らえ,生簀にかえすことができました。

7 匹の死んでしまったフナたち。最期の時は自分のふるさとで,そんな考えはなかっただろうけれど,そう思わずにはいられない出来事です。中には酸欠だけが原因ではなく,除草剤などの影響によるものもいそうです。3 匹は生簀の中で息絶えていました。子どもたちが一生懸命に土をほりだし作った生簀です。木をのこぎりで切り,留め具を作った生簀です。その中で静かにこと切れていました。その生簀を求め（習性から水を求め）もどってきてくれた親ブナを大切にしていこうと思います･･･と本書を終えたいところですが･･･また大雨予報。加えて「水」を巡る問題も再発することでしょう。物語はこれからも起承転･･･を繰り返し続きそうです。どんな「結」をむかえることでしょう。